

戦前期日本における「農村社会学」の成立・展開過程の再検討（4）

——竹内利美の農村研究から——

神奈川大学 牧野修也

1 目的

本報告の目的は、竹内利美の農村研究の作品の再検討を通して、戦前期の日本の農村研究と戦後の日本農村社会学の連続した点と断絶した点を検討することにある。このことを通じて、日本の戦後の「農村社会学」が、何を問題とし何を問題としなかったのかを明らかにする。

竹内利美は、旧制中学を卒業後、長野県の農村部の小学校の教員として勤務した後に、戦後は農村社会の研究者として活躍していくことになる。このような経歴は、他の農村研究者の履歴とは趣を異にするものである。しかし、それゆえに、竹内には「社会学」以外の学的背景があると見ることができる。その点に着目することを通じて、先に述べた戦後の「農村社会学」の特質を考えていきたい。

2 方法

報告者は、2012年の58回大会において、戦前期の竹内の仕事のうち、小学校教員としての教育実践を通じて編まれた作品に焦点を当てて報告した。本報告では、民俗学的研究と歴史的研究に主に焦点を当てるとともに、戦後の研究にも着目し報告していく。

3 結果

竹内は、日本の農村の原型を『社会経済史学』に掲載された論文や『中世末に於ける村落の形成とその展開』（1944）を通して明らかにしていく。ただし、後者については『「熊谷家伝記」の村々』（1978）の標題で書き直される。1978年版においては、1944年版では有賀喜左衛門に影響されることが多かったとし、有賀の農村への視点の相対化の作業が行われている。戦後、『東北農村と社会変動』（1963）の中で、戦後農村の新集団の形成に、東北農村の新しい状況を見いだしていくが、戦前期の農村社会モデルとの対比で描き出されている。しかし、こうした視点は、戦後特有のものではなく、戦前期においても、民俗行事の研究の中で、その萌芽的な視点も有されている。

4 結論

戦後、竹内の研究は、村落構造や機能集団への着目する視点が強くなり、民俗学的な視点は後景に退いていく。自身の「農村社会学」としていく過程で、民俗学的なるものは弱くなっていった。